

今は亡き先輩の貴重な日記を活字に直すことと、ある会でアメリカのレイシズムと警察の軍隊化について講話するための資料作り、という二つのことが重なるって、気になっていたことが直ぐには書けなかった。4月29日付『毎日』の1面トップの見出しは「日米同盟安保・経済強化」「首脳共同声明」「和解の模範」。まるで政府広報紙ではないか。

次ぎにリード。「第二次世界大戦で敵対しながらも戦後70年間、国際社会の平和と繁栄に貢献してきた日米関係を「和解の力を示す模範」とアピールする」「共同ビジョン声明」を発表した。「事実を伝えているように、称賛の高揚気分が伝わるのだ。アメリカの暗愚と狂暴をなぜ直視しないのか。」

日本研究者チャルマーズ・ジョンソン氏も指摘したが、この70年間に21〜23の国・地域で武力介入または宣戦布告なき戦争をしてきた「戦争中毒の米国」、中東ではここ15年近く殺傷・破壊・家族と地域社会の崩壊をもたらしている元凶、「ならず者米国」。原爆投下を謝罪もせず、ヒバクシャを治療せず加害効果の測定だけという二重三重の反人道犯罪にも赦しを乞わず、日本政府も天皇の「しかたなかった」のひとことに集約されるようで、互いに謝罪要求など「滅相もない」と言う「同じ穴の貉」なのだ。

あの夜間焼夷弾無差別爆撃を案出し指揮したカーティス・ルメイ将軍に航空自衛隊の育成に貢献したと勲一等旭日大綬章を授与した日本政府。広島・長崎の被爆者、ビキニ・フクシマの被爆者、水俣病の死者・患者など、枚挙にいとまがないほど、自身を含め加害者を免責しアジア太平洋地域の被害者人民に冷酷な日本政府。ヴェトナムで三〇〇万人を殺し強毒枯れ葉剤で戦後も多くのヴェトナム人民を苦しめているのに、アメリカ政府も裁判所も訴えを退けている。

外では「テロとの戦い」を名目に無人暗殺機ドローンで殺人をつづけ、内では非武装の貧困黒人青年を警察が頻繁に射殺する、「今日の世界で暴力の最大の調達人」(M・L・キング)、かつ最凶悪の武力行使者であるUSA。「和解の模範」冗談じゃない。共犯者・「ならず者同士」が責任放棄を互いに喜び合っている高慢の自己賛美。大国アメリカの人道犯罪を弾劾する

気は毛頭ない、指摘する良心もない。自らの道義的頓覚しない、私の国日本の政府。

2面では、中国との対抗を強調する。「中国の経済主導警戒」、「日米TPPで対抗」、「軍事でもつづく神経戦」。こういう報道を、主権者国民を洗脳する政府の戦略に寄り添う「たれながし」というのだろうか。

「余録」にちよつぱり懸念を表明したつもりか。「日米合意を聞き、集団的自衛権行使のための安保法制は未だ国会にも出ていないはずだといぶかしむ方もいよう。「切れ目ない協力」が「歯止めない協力」に聞こえる人も多かろう」と、自説でないことを印象づけたいよう。萎縮の典型的表現かもしれない。

このあとの半月の記事批判は断念して、5月14日付の「記者の目」の「戦後70年の憲法改正論議」。

憲法第9章第96条に「改正」とあるからは、この条文に言及する時は「改正」と書くほかないが、「自民党が」目指す「本丸」が9条改正なのは明らかだ」という文中では、「9条改悪」と書かないのはなぜか。中立公平が金科玉条なら「9条改定」と書くべきだ。主権者の多数は「9条改悪」と書いて欲しいと願う。

同日の「社説」の「オスプレイ配備」。最後の一文「配備の理屈が不明瞭で、住民への事前説明もなく、一方的に押しつけるようなやり方はおかしい」。

「おかしい」は「こっけいだ」「おろかしい」「変だ」「あやしい」「粗末だ」の意味もあれば、「好ましい感じがする」「興味がある」「かわいらしい」と、実に多義的。「社説」「論説」にふさわしいことばあるだろう。「理不尽だ」、「不条理である」、「傲慢不遜の極みである」、「民主主義に反する」など、あるではないか。

「・・・やり方は、日本国憲法の国民主権、基本的人権、非戦平和主義という3原則に照らして、到底承認できない。非は政府の側にある」と書いてもらいたい。

同日の「オピニオン」は「メディアと政治」。京都大学教授・佐藤卓己氏が、17日付「社説」が「放送局を萎縮させるような政治介入は控えなければならぬ」としたのを、池上彰氏が24日付『朝日』で、「政治介入は許されない」となぜ書けなかったのでしょうか」と書いたことを、よりましな論調と紹介する。